

将棋：盤上の実験室

竹澤浩気

将棋は、駒を使って相手の「王将」を詰ますことを目指す、日本発祥のボードゲームです。ゲームとしての完成度はもちろん、プレイヤーの個性が滲み出るのも大きな魅力です。

以前、本欄で山田鉄兵先生が将棋の魅力を語られていましたが、このゲームは一部の研究者にとって特別な意味を持つのかもしれません。私もまた、様々な人と対等に勝負し、交流できるこの趣味を続けてきました。構想を練って一手一手積み上げる将棋は、私にとって思考を試す「実験室」でもあります。

一局の将棋 一回の研究

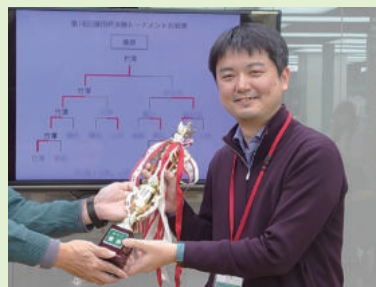
研究者の道を志してから実感するようになったのですが、将棋の一局は、実験化学の研究プロセスによく似ています。最初に序盤構想（研究テーマ・仮説）を立て、それを実現するために一手一手を指す（実験を重ねる）。そして、予期せぬ相手の指し手（思いがけない実験結果）に驚きながらも柔軟に対応し、より良い形を目指して構想を練り直す（研究をより大きな文脈に置き直す）、最後に、勝利に向かって収束させていく（成果としてまとめる）——この一連の流れは、将棋も研究も全く同じです。序盤からオリジナリティを出したくなるのも、研究者の性に通じるところがあります。

将棋を通して、「構想を練る」「先を読む」「決断する」、そしてその「結果を受け止める」といったプロセスに、自然と慣れていきました。特に後半の2つを体感できることが大きく、勝負の中で味わう決断の緊張感や失敗の痛み、そしてそれを乗り越えた先にある喜びは、研究の現場と通じるものがあります。研究の予行演習として、将棋の盤上は私にとってまさに「実験室」でした。

駒音とともに広がった世界

本格的に駒を手にしたのは中学3年の夏。野球部を引退し、何か新しく熱中できるものを探していたときでした。当時流行していた囲碁漫画「ヒカルの碁」に影響されるも、天邪鬼な私は囲碁ではなく、作中に登場する将棋部のキャラクターに惹かれた結果、将棋を選びました。

家庭にインターネットが普及し始めた頃で、本で基礎を学んだ後、オンライン対局サイトで腕を磨きました。今の自分でも想像しがたい行動力ですが、すぐに友人と自作のウェブサイトを立ち上げ、オンライン将棋サークルを運営し、小規模な大会や東京の将棋会館でのオフ会まで開催し



研究室内の将棋大会で優勝した筆者

ました（今思えば危うさもありましたが、幸い良い方々に恵まれました）。

高校では将棋部に入りましたが、研修会出身のライバルに惜敗することもしばしばで、全国大会には手が届きませんでした。それでも、寡黙で引っ込み思案だった私にとって、将棋は世界を広げる窓口であり、思考や挑戦を自由に試せる実験の場であり、勇気を持てる場所でもありました。

研究室の盤上

大学では将棋部のレベルに圧倒され、体験入部で終わってしまいましたが、学部4年で配属された（現所属でもある）藤田研究室で将棋熱が再燃しました。研究室のウェブサイトには、藤田誠先生によるエッセイが掲載されており、その中に将棋の話がありました。それを読んで、飲み会の席で先生に対局を申し込んだのが再開の第一歩でした。

1学年上の先輩・池本さん（現・東大准教授）とも指すようになり、3人の将棋熱が加速していきました。しばらくして私が助教として研究室に戻ってきた際、その熱は当時の学生にも伝播し、今ではOBも含めた定期的な藤田研将棋大会にまで発展しています。化学業界にも将棋好きは多く、研究室外から挑戦者をお招きすることもあります（先述の山田先生や、その記事に登場した九大Y先生もご参加いただいたことがあります）。興味がある方はぜひご連絡下さい。

将棋は、ロジックを楽しむ人にも、人間らしさを味わいたい人にも応えてくれる趣味です。人気が再燃しているのも、そうした懐の深さによるものかもしれません。

完成形を想像し、そこから逆算して構想する力は、将棋を通して学んだことの1つです。……とはいえ、現実には締切を前に後手に回ることもしばしば。それでも、思考（試行）を重ねる営みとして将棋と研究をこれからも（なるべく詰まされないように）真剣に、楽しみながら続けていきたいと思っています。



たけざわ・ひろき

東京大学大学院工学系研究科 特任准教授
〔経歴〕2015年東京大学大学院工学系研究科博士後期課程修了、博士（工学）。旭化成株式会社、東京大学大学院工学系研究科助教・特任講師を経て、25年より現職。
〔専門〕ホスト・ゲスト化学、有機反応化学、錯体化学。